

〈論 文〉

## 帝国論と精神史に関する一考察

——偽装されたメキシコ皇帝マクシミリアンと「帝国の発明」という概念をめぐる——

古 畑 正 富

キーワード

精神史, 包囲戦, メキシコ帝国, 皇帝マクシミリアン, ベニート・フアレス, ナポレオン三世

### Abstract

From the angle of the intellectual history, this paper examines the portrait of camouflaged emperor Maximilian of Mexico, and the concept of the “invention of empire”. Importantly, the recent study of K. Ibsen elucidates that *The Execution of Emperor Maximilian of Mexico* series (1867–1869) by Édouard Manet described the horrific character of imperialism, which deeply influenced the fate of Maximilian. Based on Ibsen’s view, step by step, we shall try to clarify three points. Such as:

(1) In light of various historical events, we understand that the invention of empire was equal to that of administrative control system named “empire”. Such socio-economic structure, in fact, made the communication line, spread all over the empire, which also determined the grand strategy of it. As a result, the collapse of the empire often emerged from the great damage and heavy loss of civil wars.

(2) According to I. Eph’al, siege warfare is a universal phenomenon, many of whose manifestations are connected to the human spirit, thus revealing similarities across place and time. Of course, this is true of the besieged city of Querétaro, where Maximilian’s remaining troops surrendered to the military operation employed by Benito Juárez. But we get a strong impression that Maximilian was obliged to gaze at the human spirit of his own, though he was faced with the hopeless defeat for the Mexican Empire.

(3) Simply put, the Mexican Empire was one of the Dominions, that is to say, autonomous vassal states ruled by Napoleon III and his viceroy (Caesar) François Achille Bazaine. Under these circumstances, Maxmilian only stood on the edge of French Second Empire. In a sense, we see that he was thrown into the vortex of war.

Far from fading into obscurity upon Maximilian’s fall and execution, his episode has continued to resonate in the cultural imaginary, including Europe and USA. Because we can approach the humanity in the meta-level through his tragic death. So, Maximilian was just the symbolic person who represented a limited possibility that we might have in modern times.

## 1. はじめに

『マクシミリアン、メキシコ、そして帝国の発明』という原題からわかるとおり、クリスティン・イブセンの著書（以下、同書と略記）は、一場の夢の記憶になったメキシコ帝国の皇帝マクシミリアン（1832-1867年；在位 1864-1867年）をめぐる考察である<sup>1)</sup>。マクシミリアンの伝記としては、すでに日本語でも平明な概説書が刊行され、その流れゆく数奇な人生の軌跡を辿ることにより、知らず知らずのうちに、ギリシア悲劇の類型を眺めることができよう<sup>2)</sup>。この問題をよりよく理解するため、奇しくも同年、パリのセーヌ左岸に生まれた、エドゥアール・マネ（1832-1883年）作の歴史画「皇帝マクシミリアンの処刑（*The Execution of Emperor Maximilian of Mexico*）」シリーズ（1867-1869年／ボストン美術館およびマンハイム市立美術館）の比較検討が必要なことはいうまでもない。なお、同書の目次とテーマ設定は、次のとおりである。序 歴史を想像すること／第1章 帝国を発明し、ネイションを想像すること：占領下メキシコの視覚文化／第2章 パリからの景色：エドゥアール・マネ作『皇帝マクシミリアンの処刑』のスペクタクルとそれに魅了される観客の姿／第3章 見えざるものを示す：映画『ファレス』（1939年）における過去の流用／第4章 他者のまなざし：帝国の周縁に立つ者と、フェルナンド・デル・パソの歴史小説『帝国からの知らせ（*Noticias del Imperio*）』。

イブセンはノートルダム大学教授であり、ラテンアメリカの興味深い女性史研究<sup>3)</sup>を世に問うているが、同様に、メキシコの作家カルロス・フエンテス論として、『記憶と欲望—カルロス・フエンテスと解釈の鉄則』<sup>4)</sup>も我々の心に残る。それゆえ、同書の比重が、人間の情動を彩った精神史(intellectual history)にあることは自ずから看取されるはずだ<sup>5)</sup>。実際のところ、目次とテーマ設定を確認すると、同書の焦点は、群衆によるヴィジュアル型の「劇場社会」へ移り変りはじめた19世紀の世相に置かれている。そうした風潮のなかに現われた帝国主義は、自他にとって生温い思想ではない。関与した人物を歯車として消費し、時には男女の別なく、まるで操り人形(puppet)のように犬死すら強制したのである<sup>6)</sup>。イブセンも同書でしばしば触れているが、鋭敏な水先案内役とすべく、当時の視覚文化を扱ったことは注目に値する<sup>7)</sup>。

上記の前提に立ち返って、本稿は、同書で省察された精神史に関する諸問題に留意しつつ、思いがけず人工的な帝国の渦へ企投された人間の動静について議論することを目的とする。「偽装された皇帝マクシミリアンの生涯とその時代」—結局、異人たる皇帝はメキシコ史において、外国勢力フランスの傀儡をつとめ、軍事的な敗北者の烙印を押された余所者(グリゴ)にすぎない。だが、皮肉な(というより、矛盾した)物語として、マクシミリアンが悲劇の果てに機械仕掛けの存在から逸脱し、彼自身を取り巻く世界の軛から解放されたことは確かであり、その点にこそ、より小さく有限の性格を孕むにもかかわらず、等身大の人間に宿る、血の通った歴史の面白さが想像されるのではないか<sup>8)</sup>。

## 2. 「帝国の発明」という概念とその歴史的背景

同書が「帝国の発明」という概念を導入した結果、個人としてのマクシミリアン、あるいは彼の妻カルロッタ(シャルロッテ・フォン・ベルギエン；1840-1927年)の非力さに軍事政権崩壊の全責任を被せなかったことは肝要であろう<sup>9)</sup>。ヨーロッパにおいて、19世紀は様々な形態を通

して、人工的な帝国が作り上げられた時代だったと見なされる<sup>10)</sup>。通史的な帝国の定義は難しいものの、ローマ帝国に関して、ドミニク・リーベンは次のように述べる。「紀元前2世紀からローマ帝国と宇宙(オイコウメネ)を同一と見たのは、ギリシア人(=ストア哲学者)にほかならない。…こうした理念は、ローマの政治家や知識人エリート(の精神)にも深い感銘を与え、その影響力を通じて、紀元1世紀には世界(オルビス・テラルム)とインペリウムはまったく同じものと見なされるようになった」<sup>11)</sup>。「前近代的な帝国の場合、統治が直接的か間接的かの区別は判然としていない。帝国の規模や通信技術の問題から、どの帝国も長期的には地方エリートに協力を仰がざるをえないのだ。近代のように、政府のあらゆる機能を実行可能にする歴大な官僚を創設するための資源も当時はなかった」<sup>12)</sup>。

それでも、長大な国境を防衛し、効率的で秩序整然とした統治と安全保障を実現するため、ローマ帝政期の軍隊では官職と組織が体系化され、前線の将軍を補佐する参謀と並び、軍政を操る幕僚の将校団も登場してきた。その際、支援軍(アウクシリア)や退役したシビリヤンの在郷軍人(予備役)を擁する地方勢力とも結託した騎士身分(エクイテス)が、後方任務を含む属州行政を担当する主演に踊り出たのであり、騎兵部隊への仕官が軍人のキャリアにおいて相当の重みを増したと考えられる。一軍令と軍政の間に暗闘が繰り返される構造にもかかわらず、ローマ軍はそこから出発し、新しい国家的均衡へ到達したとあっていい<sup>13)</sup>。ここで、王政→共和政→自由帝政(元首政)→軍人皇帝時代→権威帝政(ドミナートゥス)のように変遷したローマ帝国の政治的状况を勘案すれば、我々は「帝国の発明」というパワー・ポリティクス特有の概念に対して、「帝国と名づけられた管理体制の発明」と合理的に言葉を補うことができる<sup>14)</sup>。

このように、(種を蒔いた)前近代的帝国であれ、(後に大きく結実した)近代的国家であれ、厳格な管理体制のなかで等しく発明されたのは、点と線の実効支配を同一平面上で固める「利益循環システム」とその産物たる富国強兵政策にほかならず、社会経済の繁栄を謳歌した帝国の大綱として、軍役に司る地方拠点都市と中央のハートランドを血管のように繋ぐネットワークがきわめて有益になった環境が窺えよう<sup>15)</sup>。

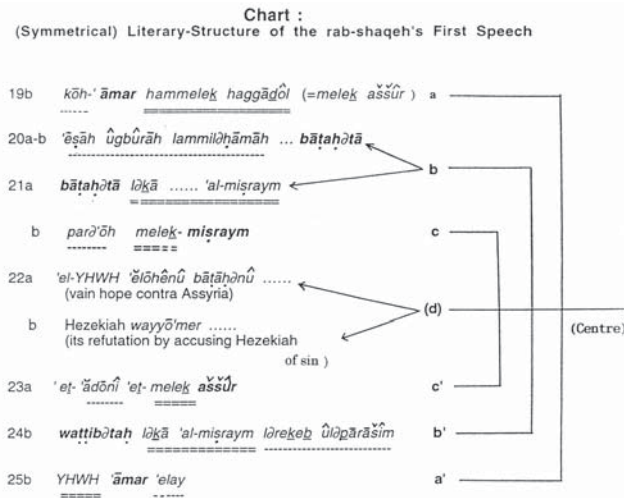
たとえば、CT 53 47+ (SAA 5, no.250)は、紀元前1千年紀に勃興し盛期を迎えた「アッシリア帝国(Neo-Assyrian Empire)」の交易・行政拠点、カール・アッシュルについて報告する軍事書簡である。最近の研究史に従えば、カールは「港(port)」ないし「波止場(quay)」という原義を有し、東地中海沿岸に居並ぶ港湾都市では、(フェニキア人の支配に代わり)後背地におけるアッシリアの覇権の証として、経済特区にも喩えられる商業基地が構築された<sup>16)</sup>。この見解は、アッシリア帝国に形成された社会的経済的構造を把握するうえで大切な道標となるが、「関所/物資集積所」の立地条件を加えると、アッシリアの軍司令部とカールを関係づける可能性は無視できない<sup>17)</sup>。なぜなら、軍事史において、戦線の延長に伴う兵站(logistics)と攻撃の限界点をつかむことは常に重要であり、輸送・補給線、すなわち連絡線を支える交通の要衝というばかりでなく、徴兵、動員、配備にかかる戦費、兵士の給与と褒賞などに当てる税収・財源を得るため、財務官(アバラック=マセンヌ・ラプー)やその属僚(ラブ・カーリ)、または従軍商人・商工ギルドの存在理由もそこに認められるからである<sup>18)</sup>。したがって、戦争はひたすら資本や軍需品を吸い込む青天井の事業であり、軍隊という荒々しい消費者を注意深く点検し、平時から見事に制御する保守的なゲーム・プランが、武力政治を基礎とする覇権国家の帝国には是非求められた<sup>19)</sup>。

さて、アッシリア帝国では、伝令と使者の混合戦略(伝令使)が政略・戦略上で重大な役割を

果たした<sup>20)</sup>。アッシリアの軍事書簡によると、諜報目的で任用された特務機関の政治将校たちが、虎の威を借る狐に化けおおせ、「私の主君たる王は、次のように言う（シャル・ベリー・イカッビ + [ウンマ]<sup>21)</sup>との言説を武器にしつつ、情報操作および外交的駆け引きに血道をあげる姿がはっきり映し出された<sup>22)</sup>。ABL 1003:12には「我々は、王の言葉を投げ所にして語る（イナ・ピッティ・ディッビー・シャ・シャッリ・イッシーシュ・ニッドウツ）」<sup>23)</sup>と記されており、四圍の状況に応じ、派遣された特使が王の代弁者として振舞うこともあった。事実、旧約聖書の「ラブ・シャケ第一の演説」（列王記下 18 章 19-25 節）において、降伏勧告の使者であるラブ・シャケが伝令の立場を踏み越え、アッシリア王の影武者のように発話している<sup>24)</sup>。さらに、アッシリアの軍事書簡にも、これと類似したパターンを発見することができよう。たとえば、ABL 548 (SAA 5, no.2) : Obv. 6-15 は、「私の主君たる王のごとく（キー・シャ・シャル・ベリー）」という修飾句を用い、「ウラルトゥ人の消息について言えば、私と対立する総督に向けて送った、私の使者が帰還した。彼（=使者）は私の主君たる王のごとく、彼（=対立する総督）に厳粛な言葉を放ったという。そして、彼（=使者）は私に手紙を書き、次のように語る」と綴っている<sup>25)</sup>。

伝令使ラブ・シャケは元来、侍従長と推察されるけれど、彼に比肩する顕官の宮廷宦官長（ラブ・シャ・レーシ）が監軍の職務と結びつく記録も残されている（ABL 304 : SAA 1, no.11）<sup>26)</sup>。こうしたアッシリアの政治将校たちに通底したのは、戦争遂行者としての鋭利な意志であり、包圍戦の意識世界を表現することであった。興味深いことに、「ラブ・シャケ第一の演説」はバランスのとれた「囲い込み形式（インクルージオ）」を維持している（表 1 を参照）<sup>27)</sup>。ちなみに、戦争の根源的な形態が包圍戦に遡りうるとすれば、ラブ・シャケの軍事演説は図らずも、人間の内部地平から現出した文学的レトリックであることが得心される。一精神史をめぐる問題を踏まえ、帝国の研究動向を把握するとき、これは決して看過できない視点だろう<sup>28)</sup>。

表 1 旧約聖書における軍事演説（ラブ・シャケ第一の演説）の囲い込み形式  
出所：Kobata 1995, p. 20.



Notes 1 : The alphabets denote the order of the sentences in each verse.  
2 : **Boldface** corresponds to the key-words above mentioned.  
3 : Direct points of contact are underlined =====.  
Indirect points of contact are underlined -----.

上記の説明に基づき、第3節ではメキシコ帝国の終焉について考察するが、「帝国の発明」という概念は、帝国の死からもおよそ逆算することができる。本稿は、消耗が激しい長い内戦により、帝国内部で軍事社会的なコミュニケーションが分解され、ほぼ完璧を誇った哨戒も見る影がなく、各地で取り返しのつかない機能不全に陥った状態こそ、帝国の主たる死因となったことを強調したい<sup>29)</sup>。換言すれば、(人間機械論を反映した)帝国の実体が、群衆(マルチチュード)の欲望を喚起する二次的な機構である以上、いつかは不具合を起こし、破壊され、刷新されていく運命を免れまい。それは、アッシリアやローマ帝国と変わらず、伝令使を縦横に走らせ国内統治に成功した、アステカ・インカを淵源とするラテンアメリカ先住民の諸帝国にも当てはまる<sup>30)</sup>。

### 3. 包囲されたメキシコ皇帝マクシミリアンの「死戦」をめぐる

フランスの社会史家である鹿島茂によれば、ケレタロ市を見下ろすセロ・デ・ラス・カンパナス(鐘の鳴る丘)におけるマクシミリアン銃殺の知らせ(1867年6月19日)は、パリで万国博覧会の褒賞授与式が盛大に行なわれている日にナポレオン三世(在位 1852-1870年)のもとに届けられた。それはあたかも、ナポレオン帝国(第二帝政)の落日を告げる晩鐘のごとく、フランス人の心のなかで鳴り響いたという<sup>31)</sup>。偶然の一致とはけだし怪しく謎めいたものだが、如法闇夜をさまようような、恐怖と戦慄の予感に満ちた思いは、萎縮とは逆方向の想像力を噴射するきっかけへ転じていく。マネの『皇帝マクシミリアンの処刑』シリーズ(1867-1869年)は、ドキュメンタリー風の生々しいタッチで、戦争の深い闇を抉り、視覚化された暗黒のスペクタクルとその比類ない迫力によって、メキシコの現場から遠く離れたパリの観客をも震撼させ、激しく魅了したのである<sup>32)</sup>。



Cover illustration: Édouard Manet, *Execution of the Emperor Maximilian*, 1867. Oil on canvas, 77 1/8 x 102 1/4 in. (195.9 x 259.7 cm). Museum of Fine Arts, Boston. Gift of Mr. and Mrs. Frank Gair Macomber, 30.444. Photograph © 2010 Museum of Fine Arts, Boston.

図1 1867年のマネ『皇帝マクシミリアンの処刑』(ボストン美術館)  
出所: lbsen 2010, Cover illustration





Figure 8. Édouard Manet, *The Execution of Emperor Maximilian of Mexico*, June 19, 1867, 1869. Oil on canvas. Staedtische Kunsthalle, Mannheim, Germany. Photograph: Erich Lessing / Art Resource, NY.

図2 1869年のマネ『皇帝マクシミリアンの処刑』（マンハイム市立美術館）  
出所：Ibsen 2010, p.89, Figure 8

図1と図2に描かれたとおり、マネは『皇帝マクシミリアンの処刑』において、マクシミリアンと彼の側近たちへ発砲する、ベニート・フアレス（1806-1872年）率いる共和国軍の兵士たちを、フランス軍の狙撃部隊になぞらえている。しかし、両者は必ずしも同一ではない。定説に従うと、図2（1869年）の原型プランが、1814年に描かれた、フランシスコ・ホセ・デ・ゴヤ・イ・ルシエンテス（1746-1828年）の傑作『1808年5月3日、プリンシペ・ピオの丘での銃殺（*El 3 de Mayo 1808. Fusilamientos en la montaña del Príncipe Pío*）』（マドリード、プラド美術館）に基づくことは確実である<sup>33</sup>。とすれば、図1（1867年）の右正面にじっと佇む（メキシコ流の帽子を被り、フランス軍の様式と異なる制服を着た）人物は一体誰を表象しているのか<sup>34</sup>。ゴヤは果敢にも、ナポレオン一世という鉄腕の軍事指導者による戒厳令の夜を批判して絵筆をとった。芸術家の使命として、マネがそうしたゴヤの政治的風刺性に倣ったのなら、この影（*sombra*）のような人物はフアレス指揮下の将軍たちの一人、たとえば、闘将ポルフィリオ・ディアス（1830-1915年）でなく、軍事政府の首班たるカウディーヨ（*caudillo*）—フアレス本人と推定される。それゆえ、マネが作品上の標的として指弾したのは、自己保身のために「守銭奴」と墮し、ミラマール条約<sup>35</sup>で誓約したかつての盟友マクシミリアンを見殺しにしたナポレオン三世のみならず、彼の後を襲い、やはり戒厳令をメキシコ全土に運ぶフアレスの「黒い馬車」でもあったのだらう<sup>36</sup>。細部を解きほぐすことによって、マネの絵画から突然、歴史という奥行きのある景色が現われてきた。彼の場合、そこには、ナポレオン三世→フアレスという強者たちの権力委譲の舞台裏に潜む、愚かしく脆弱な人間のもつ哀しい情念が象徴的に描かれていると思う<sup>37</sup>。

次に示すのは、（フアレスの司法権を頑なに拒み、無謀にも欠席した）マクシミリアンに死刑を宣告した軍事裁判が閉廷し、処刑執行を前にして、マクシミリアンとフアレスの間に一方的な意

志の交流が行なわれた場面である<sup>38)</sup>。敗者のマクシミリアンは言う。「この上なく厳かに、そして余が置かれている状況のもとで、余の血が流血の最後の一滴となるように心から願う。そして、汝らの大義を称えん。人々を和解させ、強固で安定した基盤の上にこの不幸な国に平和と静けさをもたらそうと尽力し、その高貴な目的に導いた忍耐力を称えん」<sup>39)</sup>。だが、勝者のファレスは繰り返す。「私が罰するのではなく、法律が、国民が罰するのだ」<sup>40)</sup>。彼はマクシミリアンの覚悟の言葉さえ、一介の政治犯もしくは懲りない囚人の遠吠えとして一顧だにしない。とまれ、ファレスの無味乾燥な言説は、彼の復讐心を糊塗するものを感じられるが、その隠された真意を察すると、マクシミリアンの力量と声望では「帝国を発明し、ネイションを想像すること」が画餅に帰すのは理の当然であり、それを国民の支持のもとで完遂する適格者は共和国大統領を措いて他にないと突き放したのである<sup>41)</sup>。そこには、ファレスの執拗で強烈な自意識 (ego)、彼の足元に鬱蒼と広がるジャングルの論理、ましてや、どんな妥協も譲歩も拒絶した権力者の酷烈な態度が透けて見える。この局面において、彼の値踏みをするような視線は、冷徹きわまりない計算機に等しかった<sup>42)</sup>。

それでは、マクシミリアンはいかにして最後の日々を送り、メキシコ帝国の断末魔のあがきを目撃したのか。まず、マクシミリアンにとって「地獄からの知らせ」が、メキシコ派遣軍総司令部から届いた。「これ以上、兵士一人たりとも、一銭たりとも送らない」と力説するナポレオン三世の本音が出先機関で事務化され、フランス軍はマクシミリアンとメキシコ帝国を見捨てて、本国への速やかな撤収を一年以内に完了する旨を通告したのである (1866年1月15日)<sup>43)</sup>。かてて加えて、狂瀾を既倒に廻らさんと、皇后カルロッタは単身、1866年7月8日にベラクルスへ向かい、ヨーロッパに渡りナポレオン三世と謁見したが、巻き返しの会談 (1866年8月18日) に失敗し、フランスの支援はまったく空しくなった<sup>44)</sup>。彼女はミラマール城において、メキシコ帝国の青く輝かしい未来を語り、夫に退位せず「世界で最も美しい帝国」の皇帝として名誉ある姿勢をとるよう忠告した一通の手紙 (1866年9月5日付)<sup>45)</sup> を書いたが、これが事実上の遺書となり、1867年2月5日、首都撤収のためにフランス軍の最後の兵士たちが出発した後も、メキシコに残留したマクシミリアンの行動に多大な影響を与えたことは否定できない。

なるほど、彼には依然として、保守派を中心とする手勢が控えていたけれど、骨肉相食むレフォルマ戦争 (1858-1861年) で戦場の優劣をめぐる格付けがなされており、彼らがいきなり退勢を挽回し、四方から迫りくるファレス軍の包囲網に打ち勝つ見込みはなかった<sup>46)</sup>。保守派の軍隊は消耗しながらも70日間にわたって善戦し、それに勇気を鼓舞されたか、マクシミリアンは首都から9,000のインディオ部隊を率いて出陣し、メキシコ中西部におけるカトリックの牙城と呼ばれた、トマス・メヒアの出身地ケレタロへの移動を決行したが、この隙間は明らかにマクシミリアンを陥れる罠であり、ケレタロへの道は、彼にとって「死戦」の場所を暗示するものになった<sup>47)</sup>。誇り高い彼の気持では、この益体もないシナリオは決して敵に後ろを見せる遁走でなく、あくまで皇帝の出陣による「戦術的転進」、言い換えれば「陽動作戦」を意味したのではないか。かくして、マクシミリアンは固唾を吞んで、ケレタロの包囲戦を待ち受けたと考えられる<sup>48)</sup>。だが、そのとき、政治的に貴重な皇帝の身柄がファレスの掌中にあり、やがて自在に砕きうる珠だったことは間違いなく、連絡線を切られた要衝のケレタロすら内応によって、大した損害も被らずに開城させ、軍門に下ったマクシミリアンと彼の側近たちを難なく逮捕したのである<sup>49)</sup>。

第2節で述べたとおり、戦争では賭博的な要素をできる限り排除する—これが帝国における戦略の要諦とすれば、マクシミリアンは皇帝（インペラートル）にふさわしい権力の条件を完全に欠いていた。本稿が、彼を「偽装された皇帝」と評した根拠である。つまるところ、メキシコ帝国とは宗主国フランスの周縁に立ち、フランスの軍事力に寄り添い、ナポレオン三世というボナパルティズムの「カリスマ的支配者」に属した幻影の被護国家と形容されて然るべきだろう<sup>50</sup>。ここで、ナポレオン三世の副官／利益代表に相当する人物が、メキシコ派遣軍総司令官のフランソワ・アシル・バゼーヌ元帥（1811-1888年）である。その威信がちょうど空気のように覆っている限界が、メキシコ帝国の版図を定め、フランス軍の一望監視のもとで、港湾都市ベラクルスもヨーロッパへの扉として働き、軍事費と物流の確保に貢献していた<sup>51</sup>。対照的に、フアレスの防衛拠点パソ・デル・ノルテ（現シウダ・フアレス）と外界への通路はメキシコ北部（チワワ州）にあった。リオ・ブラボア・デル・ノルテ（リオ・グランデ）川の向こうには、エル・パソと後背地のアメリカが広がり、外交書簡の往来や武器商人・兵器メーカーからの輸入を通して、両者の密やかな軍事交流が南北戦争（1861-1865年）の間も続けられたのである<sup>52</sup>。

ジェレミ・ベンサム（1748-1832年）が提唱した「一望監視装置（パノプティコン）」の効果を帝国の枠組みで少なからず具体化したのは、帝国内部に散開した伝令と使者の活動、そして馬車・鉄道を駆使する軍事郵便の集中的な運用である<sup>53</sup>。しかしながら、フランス軍はメキシコ北部において、それを安定的に達成できなかった。一短期決戦（主力の包圍→残敵の掃討）という思惑が外れ、戦略的な意味での塹壕戦、つまりはエーリッヒ・マリア・レマルク『西部戦線異状なし』（1929年）の描く膠着状態に持ち込まれたのだ<sup>54</sup>。そのために、メキシコの兵要地誌が不完全であり、兵士たちは東西のシエラ・マドレ山脈をはじめとする山岳戦への対応が著しく遅れた<sup>55</sup>。あまつさえ、南北の境界にはサカテカスのような銀山がそびえ、マクシミリアン宮廷が誹謗するところの「野盗国家」<sup>56</sup>、その先鋒として跳梁するフアレス軍の散兵（騎兵部隊）に掣肘を加えられず、戦果の曖昧なまま実行される、戦力の逐次投入と各個撃破の追撃戦に疲弊し、海外での長期滞陣に精鋭の士気も衰えていった。これは、フランス軍が展開した内線作戦の大問題であり、国家的危機を攻防自在の組織防御でのいだローマ皇帝マルクス・アウレリウス（在位紀元161-180年）率いる軍団とは雲泥の差だろう<sup>57</sup>。

フランス軍にとって、北伐でメキシコ全土を平定し勝負をつけるのは、アメリカを拘束する南北戦争の時期に限られていたが、畢竟、その時間的な余裕を奪い取り、戦場での勝利を不可能事にした軍事上の理由として、(a) フランス軍の戦力不足と補給線の問題<sup>58</sup> (b) フアレス軍の動員力と武装水準の向上<sup>59</sup>、の二項を挙げまとめておきたい。要するに、これらの不利な要因が重なり合い、南北戦争をへて、フランス軍は占領地における戦闘継続をついに諦めた。当時、メキシコは類例のない「三頭政治」、より正確には「三皇帝」が向かい合う分裂時代を迎えていたと考えられる。そこでは、①正帝：ナポレオン三世（副帝：バゼーヌ元帥）②対立皇帝：フアレス③偽装された皇帝：マクシミリアン、というユニークな構図が成立する<sup>60</sup>。正帝と副帝の軍勢が失意のうちに立ち去り、偽装された皇帝が処刑によって廃され、その戦雲の夢もはかなく四散した後、争乱の巷に引き裂かれず軍事的勝者となったフアレスが「皇帝民主主義」を標榜する新体制を発足させた。彼は辛辣で、狷介な、頑迷ともいえる「民主的独裁者」の形式を選択し、1872年に病死で燃え尽き、雲煙の彼方へ消えるまで束の間の君臨を果たすのである<sup>61</sup>。



#### 4. おわりに—偽装されたメキシコ皇帝マクシミリアンの精神史について—

マクシミリアンの悲劇的な死について、クラウセは淡々と述懐する。「…逆説的に聞こえるが、二人（カルロッタとマクシミリアン）は死ぬ間際に、この世の望み、つまりメキシコ人になることを叶えたのだ。メキシコほどこの不幸な皇帝夫妻を伝説化した国もない。」<sup>62)</sup>メキシコ人にとって、意外、不可解の思いを禁じえないところだろうが、行き当たりばったりの旅人（エトランジェ）—歴史上の表舞台に刻まれた未熟な支配者マクシミリアンの肖像には絶えず、「永遠の若者」の抱く奥深い挫折感が投影されている。そうした意味で、マトリョーシカ人形の入れ子構造のように戦争経験に取り巻かれ、たびたび袋小路でジレンマに戸惑い、感情的に混乱し、論理的に矛盾する人間模様を描きがちな我々は、彼の外的なポルトレを自己の内面へ引き付け、どうも近代人にそぐわない無器用な愚かしさに共鳴して、奇妙な懐かしさを覚えると同時に慰められるわけである<sup>63)</sup>。

後日譚になるが、年老いたカルロッタが臨終を迎え、私的な「人形の家」から解放されたのは1927年であり、第一次世界大戦後にハプスブルク家の中欧支配が崩壊し、20世紀における強制収容所の帝国も軍靴の足音をいよいよ高めていた<sup>64)</sup>。そして、公的な「人形の家」は総力戦という軍事的様相を呈し、包囲戦の意識世界が全体主義国家の「鉄の檻」になり、政略・戦略的な形で歴然と人々の日常生活へ浸透した。そこでは、強固な個の物語が世界から失われ、また、その存在をことさら希求しなかった。ただ眼前にあるものは、遠く近く潮騒がざわめくのどこか似て、現実の生存闘争のなかで押し潰し、押し潰される人間の群れが物々しく描き出す、やけに索漠としたせめぎ合いの景色だろう<sup>65)</sup>。

だから心もとなげな錯覚かもしれないが、メキシコにおけるマクシミリアンとカルロッタに歴史の悲歌、いわゆる善悪の彼岸を歩む人々の（星新一『白い服の男』の闊歩するユートピアでは到底実現できない）ロマンを感じるとすれば、「ロボット三原則」の矛盾、つまり厳格な操演モデルの掟からの逸脱に言及した、アメリカのロシア系ユダヤ人作家、アイザック・アシモフ『鋼鉄都市（*The Caves of Steel*）』が有力な手掛かりを提示すると考えられる<sup>66)</sup>。結局、ドストエフスキー『地下室の手記』にみるとおり、人間の精神に本来蔵された「閉包観念」を基盤（ファウンデーション）として、誰もが彼方の移動祝祭日を目指し、旅の途上で有為転変からくる苦悩に身を焦がしながら、やがて途轍もない膨張の果てに泡が弾け、必然的に一層の収縮へ誘われるからである<sup>67)</sup>。

大変な波瀾に見舞われたメキシコ到着以前、マクシミリアンが、アドリア海を臨むミラマール城でつらつらと執筆した『回想録』のなかに、「もしまだ架空の話でしかない気球に乗ることができるようになったら、私は（空を）飛ぼう。きっと人生最大の喜びを見出せるに違いない」<sup>68)</sup>との情熱や希望的観測が記録されているが、経歴総和とメタ論理の観点からすれば、他者の圧力によって浮世を揺らめき漂い、外地で空しく偽装されたメキシコ皇帝は、1867年6月19日において、彼の真実の姿を取り戻したにすぎない<sup>69)</sup>。これがメキシコで激しい権力闘争に直面したあげく、死の瞬間に開けられた風穴へ入り、ようやく旧に復した彷徨する魂の顛末であり、精神史に関する本稿の結論とすべく書き留めておきたい命題である。もちろん、この種の現象（表2）は予備的だが、人間が迷える者であり続ける限り、歴史の普遍文法（UG）として応用可能だろうと、本稿は考えている<sup>70)</sup>。

表 2 両極化された神と人間の存在論に関する仮定

① (仮定 a) 神の定義 : 「神は無限に開かれた, 観測されざる可能性」(否定)
② (仮定 b) 人間の定義 : 「人間は有限に閉ざされた, 観測されうる可能性」(肯定)
③ ∴ 観測されざる可能性 (negative property) と観測されうる可能性 (positive property) という両極を踏まえれば, 人間の視点が流出して, 転瞬のうちに神と交差する場合が生まれる。これは, マイモニデスの属性に関する一つの解釈である。

\*本稿の作成にあたり, 旧約聖書時代史ならびにアッシリア学に関係する文献史料を使用した。その略号は, AfO などに準拠しており, 「参考文献」には特記していない。

### 注

- 1) 本稿の注では, 同書を Ibsen 2010 と表す。本稿で考察する, 皇帝マクシミリアンの場合は, 第二次メキシコ帝国のことを指す。マクシミリアンの先例というべき, 第一次メキシコ帝国の皇帝イトゥルビデの寂然たる末路に関しては, 大垣 2008, 94-96 頁が簡明である。
- 2) 菊池 1994 を参照。加瀬 1980, 49-128 頁も読み物としてわかりやすい。太田秀通に代表されるギリシア史家の見解では, ギリシア悲劇が創造した美の形式は, そこに包摂される追求の情熱が, 現実の“矛盾”のどの深さまで到達したかによって決定され, それがドラマの構造(ドラマトゥルギー)と思想性にも浮かび上がる。
- 3) Ibsen, K., *Women's Spiritual Autobiography in Colonial Spanish America*, University Press of Florida, Gainesville, 1999 を参照。
- 4) Ibsen, K., *Memoria y deseo: Carlos Fuentes y el pacto de la lectura*, Fondo de Cultura Económica USA, México, 2003 を参照。
- 5) 精神史の方法に関しては, 歴史理論をはじめ数多くの研究があるが, 本稿では, ゲオルク・G・イッガースから知見を得た。たとえば, ドイツ三十年戦争(1618-1648年)を「軍事革命論」の叩き台にする展望は, その好例といえる。
- 6) この問題に関しては, とくにジョージ・スタイナー『悲劇の死 (*The Death of Tragedy*)』(1961年)を参照。近代の「神への信仰なき時代」に膨張した悲劇の様相は, 今後とも十分に検証すべき課題である。それゆえ, 近代を特徴づける機械論的自然観を知るうえで, 大衆の内部に深く根を張った, 消費への飽くなき欲望とそれから派生する過剰なほどの自己増殖・膨張性のベクトルを指摘する, 笠井潔『ヴァンパイヤー戦争』および笹川吉晴の解説(講談社文庫版に所収)がいたく刺激的だろう。
- 7) Ibsen 2010, pp.9-10 (Ways of Seeing) を参照。
- 8) こうしたパースペクティビズムに通じる思索に関しては, ホセ・オルテガ・イ・ガセトの著作(*Meditaciones del Quijote*, 1914 他)を参照。さらに, 「(同一平面上で断続的に結合される)権限の奪取としての歴史」の概念(選言命題:  $P \vee Q$  .....)を含むメキシコ人の精神史の奥行き, あるいは彼らの生ける理性に関しては, フェンテス『メヒコの時間 (*Tiempo mexicano*)』(1971年)の記述が基本的だが, 我々はそのから, メキシコの時間における「抑圧された遠近法」の歴史的動態を学ぶことができる。そしてメキシコ史では, かかる遠近法を表現するのが, P (保守派) と Q (自由主義派) のはざままで巻き起こる対立の連鎖であろう。なお, 神/神々の凝縮された聖

性に比すべき「メタ的な外部集合」をもつために、外在的主語（自然景観）⇔ 内在的主語（心象景観）のような、歴史上の「生活空間」ないし「環境世界」をめぐる現実と幻想の両極的で、しかもメタ論理（境界からの逸脱⇔超越）を刷り込んだリバーシブルな変相が生じる、と本稿は想定する。この問題に関しては、フエンテス『老いぼれグリンゴ (*Gringo viejo*)』（1985年）の洞察が示唆に富む。

- 9) Ibsen 2010, pp.149–150. 同書は Fernando del Paso, *Noticias del Imperio*, Mondadori, Madrid, 1987 を引用し、生皮を剥がすようにして、メキシコ帝国のメカニズムを覗き込めば、即物的な帝国主義の歴史が露になり、マクシミリアンとカルロッタの物語にみる本当の狂気も悲劇性も、そこから創出されると結論づけた。
- 10) 一般的に、19世紀は帝国論の画期と考えられる。なぜなら、アウステルリッツの三帝会戦（1805年）の前年、フランス皇帝に登極したナポレオン一世（在位 1804–1814, 15年）が、古代史へ回帰するかのように、カトリック教会と固着したシャルルマーニュ以来の神聖ローマ帝国（800–1806年）という中世的理念からヨーロッパを解き放ち、幅広い多様性を招来するに至ったからである。
- 11) リーベン 2002, 70–71頁。インペリウムは元来、ラテン語で「軍事指揮権（命令権）」を意味し、それが拡大して、一定の領域を支配する「帝国（empire）」を指すようになった（スペイン語では imperio という）。この問題に関しては、インカたちの国家組織タウンティンスーユ、すなわち「東西南北の四つの地方=方面（行政州/軍管区）」が、アッカド語で書かれた、バザルチック碑文7行目の「キブラト+ 4-ti」と符合することに、改めて注意を喚起したい。
- 12) リーベン 2002, 100頁。
- 13) 新保 2005 を参照。ポスト元首政期（中間期）である「軍人皇帝時代」（紀元3世紀）と当時の騎士身分興隆の実像に関しては、井上 1998, 37–73頁が「ガリエヌス勅令」を祖上へのせ、厳密な解釈を行なっている。付言ながら、軍令と軍政の間を橋渡しするマンパワーとして、ローマ軍の軍医（メディクス）も特筆されよう。軍医は衛生行政官であり、属州において、駐屯地周辺の住民たちの医療・健康管理にも従事し、彼らのローマ化を促進した。第二次世界大戦後、占領下の日本において、GHQの軍政部門たる PHW（公衆衛生福祉局）の業務が、その遙かなる伝統を継承し、ニュース映像で視覚化される権威になった。
- 14) 「必要は発明（物作り）の母」—ローマという改造国家のディメンションを如実に体現するのが、壮大な規模で作られた「戦略道路」の威容であり、それが帝国における「防衛的综合戦略」のシステム的な裏づけになった。ローマ帝国の「防衛的综合戦略」に関しては、Luttwak 1976；フェリル 1988, 64–66頁を参照。
- 15) 古代オリエントでは、①幹線道路（「王の道」）の建設と宿駅の充実、②騎馬急使による通信網の整備、に代表されるアケメネス（ハカーマニシュ朝）ペルシアの事例が有名であり、アッシリア帝国の発展的モデルになった。また、「インカ道」の戦略的価値、そしてタンボ（宿駅/宿泊所）とチャスキ（飛脚）の日常的風景も、ローマ街道に匹敵するものであった。
- 16) 山田重郎 2007, 5–46頁を参照。
- 17) ローマ帝政期のブリタンニアにおいて、紀元2–3世紀にタイン河口近くにあったアルベイヤ砦（現サウスシールズ）と穀物蔵（ホレア）の連結は、よく知られている。さらに、山田重郎 2007, 6–9頁（Table 1）によると、相当する立地条件から判断して、陸地を流れる河川の掌握と密接な関係があった「カール+ X（地名）」も数多く確認される。ローマ軍の作戦要務令と同じ地平に立つが、ハブル川/ユーフラテス川中流域において、監視・行軍時の陣営（キャンプ）として利用された、アッシリア軍の城砦ラインが存在したことは見過ごせない。
- 18) この実状に関しては、「ル・ネル・ドゥ・ラ・ゲール、セ・ラルジャン（戦の肝は金なり）」とい

- う古い格言を含めて、佐藤賢一『パリの蜂起』（小説フランス革命2）が簡潔的確に描写している。
- 19) こうした軍と警察の未分化な土壌が、規律と訓練のプロセスで、軍務官僚≒警察官僚の相同性を将来し、捜査本部・陣営の見方とか、索敵→捕捉→攻囲→殲滅という一網打尽の思考過程を組織内部で育てていった。そもそも、軍隊には「予算編成」の問題が不可避であり、最高司令官たるインペラートル（英語 emperor；スペイン語 emperador）の資質として、集団戦に際しての経済能力と計算能力に長けた武将が求められたと考えられる。
  - 20) Eph'al 1983, pp.102-104 (intelligence and communication).
  - 21) *ABL* 146+ (SAA 5, no.92) : Rev. 10', CT 53 874 (SAA 5, no.143) : Rev. 9', *ABL* 311 (SAA 5, no.199) : Rev. 8' を参照。*ABL* 924 (K 3045) : Obv. 1-2 は、イカヅビの代わりにキビマを使用するが、これは紀元前2千年紀の用法に由来している。
  - 22) これらの謀略関係の軍人に関心を向けると、日本近代史で暗躍した明石元二郎（1864-1919年）の経歴がふと脳裏に去来するかもしれない。彼は参謀本部と緊密な連携を保ち、日露戦争（1904-1905年）の裏面工作で精彩を放ったが、事後、公使館付陸軍武官から植民地支配の尖兵たる憲兵司令官兼警務総長へ転身した。もっとも歴史的な系譜を考慮すると、謀略部隊（≒秘密警察組織）は特異な集団に分類されず、その萌芽が古代史の段階で蒔かれたことを忘れるべきではない。
  - 23) 他に、*ABL* 1070 : 16, *ABL* 1294 : Rev. 5 を参照。
  - 24) 今からでも遅くない、と籠城側に投降を要求する帝国の交渉方針に関しては、Eph'al 2009, pp.43-54 を参照。ここでは「鉛と鞭」のように、功利性を弄ぶ甘言 (friendly words) と畏怖心を煽る脅迫や威嚇 (threats and intimidation) が同時分析される。なお、江戸時代初期の大坂の陣（1614-1615年）を題材にして、司馬遼太郎『城塞』が、こうした軍事政府（≒幕府）の二面的な形相を巧みに炙り出している。
  - 25) 前後の文脈を丹念に調べると、文中の主語が一貫して使者（マール・シプリ）を指示し、彼が城砦への攻撃の事案で糾問に赴いた様子を知ることができる。さらに、「宮廷伝令使 (palace herald)」は、アッカド語でナーギル・エカッリと呼ばれ、マール・シプリを総覧する立場にあったと考えられるが、(近代では、元帥府に列せられた) 方面軍の総司令官タルターヌに引けを取らない、隠然たる権勢を宮廷内に張っていた事実は、アッシリアの「リンム表」(910-612 BC) から明らかである。
  - 26) 古畑 2003, 205-208 頁を参照。
  - 27) 列王記下 18 章 19-25 節の文学構造を本格的に分析するため、原典 (*Biblia Hebraica Stuttgartensia*) のヘブライ語を〈記号〉として扱ったチャートを作成した。その見方は、英語の注 (Notes) に記載されており、それに従って、全体像の方向性へ注意を絞り込んで欲しい。
  - 28) Eph'al 2009, 2-3 頁は、「包囲戦は普遍的な現象 (universal phenomenon) であり、その現われの多くは人間の精神と結びつくがゆえに、場所と時間を越えた類似性を示す」と述べる。帝国と人間の内在平面に関しては、ネグリ、ハート 2003 を参照。ここで、我々は巨視的に、「帝国意識 ⇔ 帝国主義」という心理が人間の増殖・膨張する欲望から発し、それに呼応した時代の雰囲気によって加速され、強烈に覆い被さってくることを理解しなければならない。長原 2001, 147-148 頁は、「多数性の欲望が帝国の運動を肩代わりしている」と仮定した、ネグリ、ハートの存在論の核心について考察する。
  - 29) おそらく西ローマ帝国の滅亡（紀元 476 年）を、軍事システム本来の欠陥に帰着させず、それが何世紀もの長きにわたって蓄積された、組織の「金属疲労」の結果と見なすことは可能であろう。適切なアナロジーとなる、アッシリア帝国の崩壊に関しては、Zawadzki 1988 が端的に説明する。
  - 30) 語彙的な異同は当然あるが、「インカ帝国」の名祖（エポニム）—シエサ・デ・レオン（1518？



- 1554年)のクロニカ、『インカ帝国地誌』や『インカ帝国史』に記述されたインカの軍令と軍政は構造的に、アッシリアやローマ帝国と共通している。これは、アステカも同様である。アステカ滅亡に至る歴史を紐解くには、増田 2002 が役立つ。
- 31) 鹿島 2010, 525 頁。鹿島 2010 の主張に照らしてみれば、普仏戦争のセダンの戦い (1870 年) で包囲され「捕虜になった皇帝」たる悪名を残したナポレオン三世が、サン＝シモン主義の理想 (鉄の夢) から、パリ改造に付随する都市の美化・整備計画の推進など、第二帝政期に加速型の産業資本主義を育成した功績は、今日に続くフランス近代社会の底流、なにかんずく、第三共和政期におけるベル・エポックの揺り籠として再評価すべきだろう。その結果、消費は罪悪でなく、義務の観念を伴った快樂と化したのである。鹿島 2010, 455-459 頁を参照。さらに、メキシコに対するフランス干渉戦争 (1862-1867 年) が当初、「経済戦争」として火蓋を切ったことを想起しなければならない。大垣 2008, 146-147 頁を参照。
- 32) マネの『皇帝マクシミリアンの処刑』シリーズ (1867-1869 年) に関しては、Ibsen 2010, pp.51-83 を参照。本稿は同書の立場を踏襲するが、必要な場合は修正しつつ、その歴史的意義へ接近したいと考えている。
- 33) マクシミリアンと共に処刑された側近たちは、保守派のミゲル・ミラモン、先住民のカシケのトマス・メヒアという二人の将軍である。また、プロイセン軍のドライゼ銃に改良を施して、フランス軍は 1866 年、ポルトアクション式後装銃の「シャスポー銃 (chasepot rifle)」を制式採用した (幕末の日本において、幕府歩兵隊が装備した)。実際、1869 年という時代背景、右で僅かにうつむく人物の装弾確認のポーズ、そしてゴヤと同じくサーベルの佩用などから、マネもこの歩兵銃を捧げるフランス兵の軍帽の威圧感を意識し、自作の構図へ進んで取り入れたものと考えられる。
- 34) いまだ 1867 年という峠の時期に当たるため、「立て-銃」の姿勢をとった、この人物が握っている歩兵銃が前装銃 (ミニエー銃) か、それとも後装銃 (シャスポー銃) なのかは速断できないが、外見と (銃剣装着時の) 全長から推して、少なくとも映画『ターミネーター 2 特別編』(1993 年/ジェームズ・キャメロン監督) で馴染み深い、アメリカ独自のレバーアクション式後装銃 (騎兵銃: スペンサー銃あるいはヘンリー式連発銃) の系統でないことは、ほとんど確実である。それゆえ、彼が被っているつばの広い帽子は、むしろ自由主義派の人民軍兵士「チナコ」のスタイルであり、マクシミリアンの「ソンプレロ (sombbrero)」と対比されなければならない。大垣 2008, 151 頁を参照。
- 35) クラウセ 2004, 277-278 頁を参照。ミラマール条約は、1864 年 4 月 10 日から数日以内に締結された。これが、「ラテン大帝国」というナポレオン三世の野心に蕩尽され、死に至るまで悪戦苦闘を余儀なくされたマクシミリアンの人生行路の始まりであった。鹿島 2010, 518-521 頁を参照。
- 36) 1867 年と異なり、1869 年になると、時の権力者ファレスはマネの絵画で、ナポレオン三世と二重写しになっている。新聞報道がかなり発達し、海外情報の入手も比較的容易となった 19 世紀後半のフランスにおいて、このアプローチは理由のないことではない。ファレスの強権的な統治と戒厳令の施行に関しては、クラウセ 2004, 302-323 頁 (民主的独裁者) を参照。
- 37) 歴史上の人物が今に連なる「記憶としての存在」へと収斂されるなら、おぼろな姿で我々の眼前に立ち現われたマクシミリアンの肖像も、意表を衝いてまことに豊潤なイメージを伝えてくれよう。伝聞証拠になるが、マクシミリアンの最期の言葉に関しては、菊池 1994, 294 頁を参照。
- 38) 大垣 2008, 162-163 頁を参照。マクシミリアンは内心、ファレスの大統領令による恩赦 (ミラマールへの送還) を期待し、何通もの手紙と電報も打っている。にもかかわらず、マクシミリアンの努力は奏功することなく、敵方のファレスから黙殺された。同じ電報といっても、もはや寄る辺ない“孤児”のごときマクシミリアンでは、プロイセンの鉄血宰相ビスマルク (在任 1862

- 1890年)の「エムス電」(1870年7月13日)みたいな反響がたいてい聞こえてこなかったのがある。
- 39) クラウゼ 2004, 298 頁。
  - 40) クラウゼ 2004, 298 頁。
  - 41) Ibsen 2010, pp.11-50. 池田 2007, 8 頁によると、ネーションは「ある領域国家の住民が、身分・職業・地域・民族などの違いを超えて、それへの帰属意識を共有する『主権をもつ共同体』」である。ここで、ナポレオン三世も、共和国大統領(在任 1848-1852年)から申し上がり、クーデタによって政権を掌握し、皇帝位に就いた経緯を念頭に置いても無駄ではないだろう。
  - 42) 中国古代の「法家」のように、フアレスは法に内在する宗教的意識を深め、法を崇拜するために、執着心を燃やしていた。そうした彼の性格を形づくる端緒となった生い立ちに関しては、クラウゼ 2004, 225-238 頁を参照。
  - 43) クラウゼ 2004, 289 頁を参照。加瀬 1980, 101 頁は、練達の外交官らしい臨場感を發揮し、こう訳している。「フランスは全力をつくしたが、メキシコ情勢は少しも改善せず、もはや国民議会が戦費を協賛しない。他方、貴国は戦費を負担できぬといわれるから、残念ながら、遠征軍を撤退せねばならぬ事態に立ち至った…」。
  - 44) クラウゼ 2004, 291-294 頁を参照。両者の最後の対決は、1866年8月18日になされた。まさに、当時のメキシコで流行した、ビセンテ・リバ・パラシオの歌『さようなら、ママ、カルロッタ』を彷彿させる成り行きであった。
  - 45) クラウゼ 2004, 294-295 頁および 301 頁(註 21)を参照。ただし、国内の自由主義派を侮り、フアレスは臣下にすぎないと決めつけ、メキシコ帝国に対するアメリカの現実的な脅威を軽んじるなど、カルロッタにはヨーロッパの王侯独特の傲岸さといおうか、理不尽な認識が目立っている。
  - 46) レフォルマ戦争とその余波に関しては、クラウゼ 2004, 251-268 頁を参照。アステカの闇の神テスカトリポカを鏡で映し出したように、フアレスは硝煙が立ち昇る、血腥い内戦に精通したバテランであり、生来の貴公子マクシミリアンとはひどく隔たりのある人物だった。
  - 47) 権力の神秘主義者として、フアレスは過去を捏造せず、揺るぎない信念のもとに過去を流用したのである。フアレス軍が見せた分進合撃は、包囲戦を志向する外線作戦の顕著な特徴だが、これはフアレスの創意工夫といえず、エルナン・コルテス(1485-1547年)がテノチティラン陥落時(1521年5月22日から8月13日)の布陣でも実施していた。アステカ滅亡の故事を知っていたフアレスは、鉄環で締め付けたマクシミリアンに対し、1520年の「悲しき夜(La noche triste)」の事件を再現し、続いて長蛇を逸した「オトゥンパの戦い」をも反転させる策を練っていたのではないか。増田 2002, 80-116 頁を参照。関連認識として、Ibsen 2010, pp.93-124 が有意義である。
  - 48) フアレス軍の砲兵部隊による攻撃を受け、マクシミリアンが四面楚歌に陥った、ケレタロの包囲戦をめぐる状況に関しては、加瀬 1980, 115-121 頁を参照。籠城戦というのは、他に救援の目処があった場合にはじめて活路が見えてくる。その戦訓を信じれば、ことによると、マクシミリアンは敵の大軍(マリアーノ・エスコベドの25,000 および後続のフアレス軍諸部隊)の猛攻を支えきり華々しく撃退した後、勝利の風聞に乗せて、フランス本国に鎮座するナポレオン三世へ誘いの使いを送る予定だったかもしれない。
  - 49) ボルフィリオ・ディアスの哨戒で脱出ルートの子エブラ市周辺が封鎖、そこで援軍の通過もびたりと阻止され、外界へ出る袋の口が閉ざされたことにより、密室にいるマクシミリアンの運命は風前の灯火へと変わった。この絶望的な情勢下で、マクシミリアン側の防諜は何ら機能せず、疫病(epidemics)のような裏切り者が続出した。なかでも劇的なのが、エスコベドと内通して、

- 利敵行為に走った親衛隊のロベス大佐であろう。状況証拠になるが、我々はこのエピソードから、ファレスの伝令使（謀略部隊）の浸透—後の治安維持隊／広域国家警察隊（大垣 2008, 169 頁の訳語）の恫喝があった形跡を推理することができる。
- 50) アッシリア帝国の勢力圏 (orbit) に位置する自治領 (Dominion = autonomous vassal state) の創設に関しては、Cogan 1974, pp.65-96 を参照。この政策は「分割統治 (divide and rule)」の発想に起因するもので、帝国が覇権国家だけでなく、「諸侯の利益のための協定」という連邦国家の色彩も帯びていたことを示唆する。非公式帝国 (権益下の属国) 論を含む、20 世紀におけるイギリス帝国に着目した論文集として、木畑、後藤 2010 が長期の、広範囲にわたる人の連帯や移動、そして摩擦など、越境的活動に基づくグローバルな側面を検討している。
- 51) エドワード・W・サイードは『文化と帝国主義 (*Culture and Imperialism*)』(1993 年) のなかで、西欧の近代化において、帝国主義は誰も疑わない、見えない監獄であり、空気のようにだと規定している。
- 52) ファレスはワシントンにメキシコ代表部のマティアス・ロメロを駐在させるにとどまらず、アメリカの新聞記者からも抜け目なく最新情報を収集していた。大垣 2008, 154-156 頁を参照。南北戦争の通史として、本稿は、ブルース・キャットン (Bruce Catton) が書いた『南北戦争 (*The Civil War*)』(翻訳: パベルプレス, 2011 年) を通読した。また、19 世紀の軍隊事情を知悉した、柘植久慶『マキシミアンの傭兵』もそれを補完するデータを提供してくれよう。
- 53) ベンサムの問題について、本稿は主として、ミシェル・フーコー『監獄の誕生—監視と処罰』(1975 年) の分析を参考にした。松葉 2003, 182 頁によると、プーランヴィリエ (1658-1722 年) の戦争論の意義を検討した結果、フーコーは、「政治とは、他の手段による戦争の継続である」と指摘し、人種差別主義と結びついた現在の生—権力が、正戦という形式で、国内の〈異常者たち〉を雁字搦めにして、彼らの排除に行使された実態を暴露する。この問題に関しては、カール・フォン・クラウゼヴィッツ『戦争論』(1832 年) が古典的である。軍隊というものは命令を受けるや迅速な行動に移らなければならないので、各地と連絡をとりながら作戦を進めていくことのできる、軍事郵便の制度は非常に便利である。
- 54) 著者の歴史観を別にすると、第一次世界大戦 (1914-1918 年) に関しては、A. J. P. テイラーによる「目で見る戦史」がその変遷を網羅している。
- 55) 佐藤賢一『ペリー』によると、鉄道こそ工業発展の要であり、国家を一つに纏める鍵でもあった。さらに、鉄道網の整備は軍事作戦のうえで決定的な重要性を有し、その点、フランスも例外ではなかった。鹿島 2010, 266-279 頁 (鉄道戦争) を参照。それゆえ、「機動と集中」の原則に反する、山岳重畳のメキシコの国土にあって、フランス軍の行動は緩慢となり、武装民衆の抵抗 (ゲリラ戦) に対し有効に戦うことができず、致命的な破局をもたらす危険性が潜在していた。この問題に関しては、アントワーヌ＝アンリ・ジョミニ (1779-1869 年) がスペイン戦争 (1808-1814 年) を素材にして、1838 年の著書『戦争概論』で痛烈な警告を発している。
- 56) ファレスについて、カルロッタの手紙 (上掲の注 45) は、「…君主国は人類の救済であり、国王は善良な牧童であり、大統領はメルセナリー (mercenary) なのです」と記している。この中世的な思考 (傭兵⇔野盗) では、マキシミアン宮廷と敵対し、各地を機敏に移動するファレスが大統領から転位し、不埒な反乱を引き起こした (傭兵崩れの) 野盗の頭目に擬せられても不思議でない。佐藤賢一『傭兵ピエール』を参照。
- 57) マルクス・アウレリウスとマルコマンニ戦争 (紀元 162-180 年) を理解するために、Birley 2000, pp.159-183 (*The Northern Wars*) を参照。この戦争の間、政界における軍事エリートの台頭と活躍が目覚ましく、彼らの主導によって、ローマ帝国は「軍人皇帝時代」への道に踏み出したと考えられる (『ヒストリア・アウグスタ』による)。上掲の注 13 を参照。

- 58) ワーテルローの戦い(1815年)など、近代戦に対するアレクサンドロスの深甚な影響に関しては、フェリル 1988, 273-327 頁を参照。フェリルの意見に従えば、内線作戦におけるアレクサンドロスの「槌と鉄床」戦法は、歩兵部隊の掩護のもと騎兵部隊の突撃により、一気呵成に敵軍の戦列を突破、後衛を挟み撃ちにして、しかる後に全軍で徹底的な追撃へ転じるという構想であった。これは今日もなお、包囲戦の嚆矢として軍事史のなかに脈々と息づいている(二重包囲もその変形である)。だが残念ながら、フランス軍には、そのために新鮮かつ十分な余剰戦力(general reserve)が与えられていなかった。1866年12月6日、義勇兵部隊が解体され、6,545のオーストリア軍のうち3,600、アルフレド・ハン・デル・スミッセン指揮のベルギー駐屯軍約1,000がヨーロッパへ帰還し、フランス軍26,000も翌年初めにはメキシコから撤収した。フランス軍についていえば、1863年6月に30,000(フォレイ将軍)、1865年2月に27,000(バゼーヌ元帥)であり、1863年1月以降は平均27,667(母標準偏差:1,700)程度の兵数で推移(正規分布)したことがわかる。Ibsen 2010, p.7; p.154, n13; p.155, n18 他を参照。この陣容では、とりわけクリミア戦争(1853-1856年)の派兵総数14万人(戦病死7万5千人を含めた、犠牲者9万5千人)に比べて僅少である。鹿島 2010, 393-415 頁を参照。さらに、フランス本国とメキシコの間の海上補給線があまりに長く、フランス軍の弱点である兵站の不備(弾薬不足)が露呈した恰好になってしまったと考えられる。実際、機関銃の前身となる、フランス軍のミトライューズ斉射砲も新大陸の戦場では宝の持ち腐れに終わった。
- 59) 慎重に見積もっても、フランス干渉戦争の犠牲者は総計で、フアレス軍48,096であり、フランス軍は6,654に達した(義勇兵部隊1,823, ベルギー駐屯軍850といわれる)。クラウセ 2004, 314 頁によると、フアレスが政権掌握後に軍の人員整理を断行した際、8万人の常備軍が健在だったので、単純計算では $80,000 + 48,096 = 128,096$ となり、フアレス軍に蝟集した農民兵や町人兵の数はフランス軍を圧倒的に上回っていた(現実には13万人以上、それに臨時の強制徴募が追加される)。アメリカの支援で銃火器がフアレス軍へ流れ込み、中核の騎兵部隊がレバーアクション式後装銃によって増強されたことは疑いない。上掲の注34を参照。ただし、フランス軍と比較して、やむなく7倍を超える戦死者を出し、長期戦の負担に悪化したフアレス軍の財政状態、また武器商人・兵器メーカーによる売り捌きの傾向から総合的に判断すると、十把一絡げの歩兵部隊には多くの場合、北軍の標準装備であったスプリングフィールド銃(ミニエー銃)のような前装銃が配備されたものと予想してよい。
- 60) バゼーヌ元帥には現地軍の総大将としての自負があり、ポルフィリオ・ディアスと手を組み、彼自身が新たな「メキシコ皇帝」の地位を狙って権謀術数をめぐらせたと取沙汰されている。鹿島 2010, 523 頁他を参照。
- 61) 上掲の注36を参照。長期独裁政権(1876-1911年)を築いた、フアレスの後継者ディアスはもともと、ナポレオン三世(バゼーヌ元帥)ーフアレスーマクシミリアンという三位一体が作り出す結界から外れていた。しかし、1873年に開設されたメキシコの鉄道が、そのディアスの肩入れで飛躍的に発展し、急速な鉄道網の整備が行なわれたことは皮肉である。ディアスの政治手法に関しては、クラウセ 2004, 336-345 頁(秩序、平和、進歩)を参照。
- 62) クラウセ 2004, 299 頁; 大垣 2008, 164 頁。
- 63) クラウセ 2004, 306 頁はマクシミリアンについて、「自らのドラマを織り込んだ、一貫性のないドラマティックな役回りをこなす器量を持ち合わせていた」と喝破している。彼とカルロッタとの間には「純愛」とは程遠い逸話も散見されるが、だからこそ、山田風太郎の歴史小説『魔群の通過一天狗党叙事詩』の結末に刻まれたモチーフ、煎じ詰めれば、ある種の聖性の呪縛の下で捕囚され、呻吟する男と女の「愛の嵐(tormenta)」が浮き彫りになり、我々の傷を負った心のなかでしみじみと、まさに海鳴りのごとくこだまして興味が尽きない。山田風太郎は言う。「こ



- の英雄的で、無惨で、愚かしくて、そして要するにつじつまの合わないドラマの終局には、ただあのうらぶれた老行商人と老女郎の死に顔が二つ残っただけではないか。…時と場所こそちがえ、あれはまさしく哀切な心中 (double suicide) にまちがいがなかったと」。
- 64) 正確な時点は不祥だが、1866年9月末、マクシミリアンとメキシコ帝国の前途に絶望したカルロッタは、この書簡をマクシミリアンへ送り、バチカンに教皇ピウス9世 (在位 1846-1878年) を訪問したときに発狂した。常軌を逸し、正気を失った彼女はオーストリアの精神病院に収容された後、生まれ故郷のベルギーの城に幽閉された。その間、カルロッタは死ぬまで、この暗く冷たい、深沈たる静寂に包まれた最小限の世界で虜になり、マックス (マクシミリアンの愛称) と呼んでいたぼろ切れの人形を相手にして、一所懸命にメキシコ帝国の思い出を話し続けたという。クラウゼ 2004, 296頁他を参照。
- 65) コンラート・ローレンツ『いわゆる悪一攻撃の自然史へ向けて』(1963年)が「人間の原罪としての戦争」という問題を鋭く吟味している。ここで、我々のヒューマニズムにとって苦く、重く、しかも衝撃的な過去の歴史を証言する、通称「ヴェル・ディヴ (冬の屋内競技場) 囲い込み事件」(パリ, 1942年7月16-17日)を思い起こしてみたい。
- 66) アシモフとゲーム理論 (①ミニマックス法と混合戦略②ナッシュ均衡③囚人のジレンマ)の絡み合いは、科学史の啓蒙書で取り上げられる事例である。他方、アシモフの合理主義と対峙する位相から、人間の引き裂かれた自画像 (ego) を見据える試みとしては、リチャード・マシスン『地獄の家 (Hell House)』が典型的だろう。
- 67) ユダヤ神秘主義が最大限の価値を秘める「ツィムツム (収縮)」の観念を抽出したことは重要である。
- 68) クラウゼ 2004, 272頁; 大垣 2008, 145頁。
- 69) この問題に関しては、オクタビオ・パス『孤独の迷宮 (El laberinto de la soledad)』(1950年)が「メキシコの仮面」というキーワードを追究している。
- 70) 神の絶対的統一性と無形性を『ミシュネー・トーラー (律法の再説)』で詳細に論じた、マイモニデス (1135-1204年/スファラディ=スペイン系ユダヤ人の哲学者)は主著『モーレー・ネヴェーヒーム (迷える者への手引き)』で、完全な神の存在を「否定」として定義すべきであると説く。それゆえ、対位法に則って、不完全な人間の精神を「肯定」と定義することができる。

## 参考文献

池田嘉郎

2007 『革命ロシアの共和国とネーション』(山川歴史モノグラフ14), 山川出版社。

井上文則

2008 『軍人皇帝時代の研究—ローマ帝国の変容』, 岩波書店。

大垣貴志郎

2008 『物語 メキシコの歴史—太陽の国の英傑たち』, 中公新書。

鹿島茂

2010 『怪帝ナポレオン三世—第二帝政全史』, 講談社学術文庫。

古畑正富

加瀬俊一

1980 『王冠と恋—ハプスブルク宮廷の愛人たち』, 文藝春秋。

菊池良生

1994 『イカロスの失墜—悲劇のメキシコ皇帝マクシミアン一世伝』(第一部「ハプスブルクの異端児」, 第二部「ケレタロに墜つ」), 新人物往来社。

木畑洋一, 後藤春美編

2010 『帝国の長い影—20世紀国際秩序の変容』, ミネルヴァ書房。

クラウゼ, エンリケ

2004 『メキシコの百年 1810-1910—権力者の列伝』(大垣貴志郎訳), 現代企画室。

古畑正富

2003 『『旧約聖書』における政治演説の構造—異空間としての古代人の精神—』, 『異文化を知る ところ—国際化と多文化理解の視座から』, 奥川義尚, 堀川徹, 田所清克編, 199-210頁, 世界思想社。

新保良明

2005 「ローマ帝政前期の騎士将校に関する一考察—仕官と任務を巡って—」, 『青山史学』23, 189-211頁。

長原豊

2001 「〈交通〉する帝国—多数性—外部なき〈帝国〉と内在する絶対的〈外〉としての多数性—」, 『現代思想』29-8(特集 帝国—グローバル化への新視角), 132-151頁, 青土社。

ネグリ, アントニオ, マイケル・ハート

2003 『〈帝国〉—グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』(水嶋一憲, 酒井隆史, 浜邦彦, 吉田俊実訳), 以文社。

フェリル, アーサー

1988 『戦争の起源—石器時代からアレクサンドロスにいたる戦争の古代史』(鈴木主税, 石原正毅訳), 河出書房新社。

増田義郎

2002 『アステカとインカ—黄金帝国の滅亡』, 小学館。

松葉祥一

2003 「歴史・人種・権力—フーコーによるプーランヴィリエの戦争論—」, 『現代思想』31-16(総特集 フーコー), 172-183頁, 青土社。

山田重郎

2007 『アッシリア帝国の支配と領域に関する総合的研究』, 平成14年度~平成17年度科学研究費

補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書，課題番号 14510397，筑波大学大学院人文社会科学研究所。

リーベン，ドミニク

2002 『帝国の興亡（上）—グローバルにみたパワーと帝国』（袴田茂樹監修／松井秀和訳），日本経済新聞社。

Birley, A.R.

2000 *Marcus Aurelius: A Biography*, Rev. ed., Routledge, New York.

Cogan, M.

1974 *Imperialism and Religion: Assyria, Judah and Israel in the Eighth and Seventh Centuries B.C.E.*, Scholars Press, Missoula, Montana.

Eph'al, I.

1983 "On Warfare and Military Control in the Ancient Near Eastern Empires: A Research Outline", *History, Historiography and Interpretation: Studies in Biblical and Cuneiform Literatures*, Tadmor, H. and M. Weinfeld (eds.), pp.88 – 106, Magnes Press, Jerusalem.

2009 *The City Besieged: Siege and Its Manifestations in the Ancient Near East*, Brill, Leiden/Boston.

Ibsen, K.

2010 *Maximilian, Mexico, and the Invention of Empire*, Vanderbilt University Press, Nashville.

Kobata, M.

1995 "An Analysis of the rab-shaqeh's First Speech: Was It Political Speech Written in the Letter Form?", term paper submitted to Professor M. Cogan, Hebrew University of Jerusalem (unpublished).

Luttwak, E.N.

1976 *The Grand Strategy of the Roman Empire: From the First Century A.D. to the Third*, The Johns Hopkins University Press, Baltimore/London.

Zawadzki, S.

1988 *The Fall of Assyria and Median-Babylonian Relations in Light of the Nabopolassar Chronicle*, Eburon, Delft.

